

聖書日課 『からし種』 2026.2.1-2.8

2月1日 (日) レビ記 4章	「これは過って主の戒めに違反し、禁じられていることをしてそれを一つでも破った時の規定である」(2節)。私たちは個人としても特定の役職にあっても、また共同体全体としても「過ちを犯す者」として主に受け容れられている。だからこそ互いに過ちを放置せず、丁寧に繰り返し主の導きを求めたい。律法では主への「献げ物の儀式」がその表現なのだろう。
2日 (月) レビ記 5章	「人たるものがそれをしたら罪となりうることの一つについて」(22節)。色々な罪や過ちに対する色々な献げ物の話が綿々と続く中、突然目を覚まさせる言葉「人たるものが」。神御自身にかたどって創造され、命の息を吹き込まれ、神の独り子の命によって新しく生かされた「人たるものが」、今この世界で「それをしたら罪となること」をどれだけしていることか。
3日 (火) レビ記 6章	「祭壇の上の火は常に絶やさず燃やし続ける」(6節)。「燃やし続ける(2節)」に「絶やさず」が付き(5節)「常に」まで付いて(6節)繰り返される。「焼き尽くす献げ物」の元の意味は「上へ向けて」の意味だと言う。荒野の夜、深い闇の中で、天にいます神とのつながりを確かめるためだったのか。「み言葉もて霊の火を(新生讃美歌260番)」の願いへのつながりを感じる。
4日 (水) レビ記 7章	「(和解の献げ物を)感謝の献げ物としてささげる場合」(12節)。「和解の献げ物」の元の意味には諸説あるが、罪や過ちの「責め」でなく、「満願(主への誓いを果たす)」や「随意」で人が主に近づこうとする献げ物であると言える。「和解」は、イエス・キリスト御自身が献げ物となって神と人との和解を成してくださった(ロマ5:10等)ことを受けての訳かもしれない。

メール配信登録メール senforn.obc@gmail.com

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2026.2.1-2.8

<p>5日 (木)</p> <p>レビ記 8章</p>	<p>「共同体全員を臨在の幕屋の入口に召集しなさい」(3節)。 アロンとその子たちが主の祭司とされる任職式は、共同体全員の出席の中で行われた。祭司たちが水、血、香油により清められ、式服や飾りが順々に着けられる中、会衆はただ立って見届けるだけ。長時間、血と香油の混じったにおいに気絶しそうだが、証人という大事な役割を託されたのだろう。</p>
<p>6日 (金)</p> <p>レビ記 9章</p>	<p>「そのとき主の御前から炎が出て、祭壇の上の焼き尽くす献げ物と脂肪とをなめ尽くした。これを見た民全員は喜びの声をあげ、ひれ伏した」(24節)。前章の任職式から本章の献げ物の執行までの間ずっとそこにいた会衆が、本章最後で大きな喜びを受ける。入念な手順をかけて任職された祭司からの祝福、そして驚くべき神の栄光の顕現。</p>
<p>7日 (土)</p> <p>レビ記 10章</p>	<p>「わたしにこのようなことが起きてしまいました。わたしが今日、贖罪の献げ物を食べたとしたら、果たして主に喜ばれたでしょうか」(19節)。「今、子を失った父親のわたしに、それでも儀式的な清さが必要ですか」。大きな喜びだった神の火が一転して死をもたらす、不可解な神の御心。レビ記は単調な掟の書ではなく、人の当惑と問いも率直に記されている。</p>
<p>2月8日 (日)</p> <p>レビ記 11章</p>	<p>「あなたたちは自分自身を聖別して、聖なる者となれ」(44節)。「汚れ」に関する規定の数々は、新約で「神が清めた物を清くないなどと言ってはならぬ」(使徒 10:15)という御言葉で乗り越えられた。ただ、神がなぜ「聖なる者たれ」と求めたのか。それは出エジプトの解放の恵みだけ(45節)を握りしめて生きる者となるため。その主の御心を大切に受けていきたい。</p>